

大学生の過去10年の性格傾向変化

持主 弓子 柚木 さおり 藤田 彩子 舛田 博之
(株式会社 リクルートマネジメントソリューションズ 組織行動研究所)

The change of personality in the past decade among university students
Yumiko Mochinushi Saori Yunoki Saiko Fujita Hiroyuki Masuda
RECRUIT MANAGEMENT SOLUTIONS CO., LTD.
Institute for Organizational Behavior Research

1. 問題の背景

団塊世代の大量定年をむかえ、さらに少子化が進む環境下にある企業にとっては若手社員の育成は死活問題といえる。その一方で、若手社員の育成については多くの企業が課題を抱えているのが実態である。その原因の1つとして若手社員の性格の変化が挙げられることがあるが、若手社員の予備群である大学生の性格の年代別傾向を確認した研究は80年代あたりからいくつか行われている。寺崎(1985)は1970年から1984年間の関西学院大学の大学生を対象に性格検査であるMPIを用いて性格変化の逐年変化を確認した。菅野と辻(1996)は1958年から1991年までの京都大学の学生の性格の変化を独自の性格項目を使って調査し、中村(2003)は千葉商科大学の1986年、1994年、2002年の新入生の性格変化についてYG(矢田部・ギルフォード)性格検査を用いて確認を行っている。

これらの先行研究は、いわゆる若者論や大学生論といった形での提言ではなく、実際の大学生の特性の変化を、性格検査を用いて実証的に確認した点で意義深い。しかし、単一の大学のみを対象とした調査であり、広く大学生または若手社員を対象として、性格傾向の逐年変化を確認することが必要であること、また特に若手社員の育成が大きな問題となってきたここ10年の傾向を確認する必要があると思われる。そこで、本研究では、若手社員の育成が大きな課題となりはじめた1997年から2007年までのおよそ10年間を対象に

総合検査SPI・SPI2を用いて大学生の性格の変化について確認と考察を行った。

2. 分析手法

<データ>

1997年から2007年間に採用選考時または内定時に実施された総合検査SPI・SPI2(Synthetic Personality Inventory / 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ)のデータを使用した。SPIは性格17尺度及び一般知的能力検査2尺度、SPI2は性格13尺度及び一般知的能力検査2尺度で構成されており、本研究ではSPIとSPI2に共通の13尺度を用いて確認を行なった。各性格尺度は17~20項目を使って測定されており、信頼性係数(Cronbachの係数)は.80~.91である。

<分析デザイン>

1997年~2003年データ

質問冊子と回答用紙を使った検査方法が主流であったため、この実施形態にて得られたデータを10万件にサンプリングし、その中から21~23歳までの卒業見込み者データ(約5万~6万件)をとりだし、各尺度の素得点の平均の推移を確認した。変化の幅をより明確にするために1997年を基準とし、各年の平均と1997年平均の差を1997年結果での標準偏差(以下SD)で割った値を確認した。考察にあたって大学生だけではなく、別の年代の結果との比較を行うこと、大学生の結果と別の年代での結果でのSDにはそれほど大きな違いがみられなかったことから、SDは

サンプリングで得られた10万件データでのSDを用いている。

2004年～2007年データ

CBT (computer-based testing) による受検が主流となってきたため、CBTにて受検を行った21～23才までの卒業見込み者データ(2004年約8万7千件、2005年約15万件、2006年約21万件、2007年約19万件)を用いて確認を行なった。

CBTは、テスト理論の1つである項目反応理論に基づいて採点がなされ、個々人の採点結果は「 τ 」というスコアで表される。 τ はゼロの位置が任意に決められ、1標準偏差分の差が1になるような数値である。また、 τ は毎年同じ基準・方法で算出されるため、経年比較が可能である。ここでも、変化の幅をより明確にするために、2004年を基準とし、各年の結果を2004年との差で表した。

3. 結果

図1は1997～2003年までの13尺度での変化の推移を示したものである。持続性、敏感性、自責性に一定の上昇傾向がみられた。データの男女比率を確認したところ、女性の比率がこの7年間で36%～46%に変化していたため、男女別での各尺度の変化の確認も行なった。男女別では男性の結果に内省性、持続性、敏感性、自責性の上昇が、女性の結果に持続性、達成意欲、敏感性、自責性、高揚性に上昇がみられ、先に図1で確認をした持続性、敏感性、自責性は男女共通にみられる上昇傾向であることが分かった。

2004～2007年までのデータでは特性値を確認しており、その推移を示したのが図2である。2004～2007年で内省性、達成意欲、敏感性、自責性、独自性、自信性に τ で0.1以上の下降または上昇がみられた。1997～2003年までに上昇傾向がみられた持続性は2004～2007年の間では下降傾向がみられた。以上のことから、敏感性、自責性の2つの尺度については、この11年間で継続的に上昇傾向があることが分かる。

敏感性、自責性の結果が大学生以外でも、つまり世代を越えて共通でみられる傾向であるかを確認するために1997～2003年までのデータで年代別の傾向を確認(図3)したところ、この2尺度は10代20代以外では継続的な上昇傾向を認めることはできなかった。

4. 考察

分析の結果、敏感性、自責性の2つの尺度に1997年以降の約10年間、継続した上昇傾向がみられた。また、この2尺度は30代以降の年代では、明確な上昇傾向は認められなかった。

ここで注意しなければいけないのが、尺度を測定する項目の中に、年月とともに回答傾向が変化する、いわゆるドリフト項目が存在する可能性である。これはいわば項目の劣化であり、ある特定の項目に対する反応のみがこの10年で極端に変化していたとすると、得点の上昇傾向は特定項目に対する限定的な変化であり、尺度得点の変化ではない。ドリフト項目は他の項目と比較して回答傾向が大きく変化をしている項目であることから、1999年、2000年、2002年、2003年の各項目にYESと回答をした割合を算出、定点観測的にその割合の変化の程度を確認した。1999年、2000年、2002年、2003年の4年で各項目のYES回答率の変化は敏感性を測定する19項目では-1.1～3.1%、自責性を測定する19項目では-1.3～3.8%であり、いずれもドリフト項目と思われる項目は見当たらなかった。また、敏感性、自責性の変化は年代別でみたとき30代以降は継続的な上昇変化はみられなかったことからドリフト項目の可能性は低いと考えられる。

先行研究の結果をみても、菅野・辻(1996)は1958年～1991年までの京都大学の学生のデータを分析、1979年以降、消極性と情緒不安定性の得点が少しずつ高くなる傾向にあることを述べている。また、溝上(2001)は大学生の自己評定を規定する大きな要因として対人関係を挙げ、対人関係のと

り方の未熟さからくる悩みから情緒不安定になりやすい者が多い傾向があることを述べている。中村(2003)は千葉商科大学の学生の結果から情緒不安定性が高くなり、行動力が弱くなる方向に変化してきていることを報告している。SPI・SPI2の敏感性は「神経質で、周囲に敏感な傾向」、自責性は「不安を感じたり、悲観的になりやすい傾向」を測定する尺度であり、この2つの尺度の得点が高い場合は情緒的に不安定でストレスに弱い傾向となる。この2尺度の変化は先行研究でみられた変化の方向性と合致している。また年代別の傾向で敏感性、自責性に関しては30代以降では継続的な上昇が認められなかったが、これも大学生の性格特性が徐々に変化をしてきていることを示唆するものかもしれない。このように、先行研究と同様の変化の方向性を示す点を考慮すると、大学生の敏感性、自責性に関わる性格特性に変化が起きている可能性はあると思われる。しかし、以下3つのポイントからこの結果だけを持って大学生の性格特性が変化していると結論付けるのは難しいと考えられる。

1 つめは、SPI・SPI2が採用場面に使用される検査であるという点である。採用という特殊な環境下では、大学生が自己の強みと認識している部分が日常場面で測定をした場合よりも強く表われてしまう可能性も考えられる。株式会社リクルートマネジメントソリューションズが2005、2006年に行った新入社員意識調査(2005年:1492名、2006年1412名)の結果によると自己の強みとして挙げている上位3項目は「真面目さ」「社交性」「粘り強さ」である。また三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社が2008年に出した「平成20年度新入社員セミナーアンケート結果」(202社682名)では、社会人としての自分の能力に自信ありとした上位3項目は「忍耐力」「責任感」「協調性」であった。自責性が高い場合の特徴の1つである受容的な面は「協調性」や「社交性」につながる部分があるといえる。こうしたことが、各尺度

の得点に影響を及ぼした可能性も考えられる。

2 つめのポイントは求人倍率の変化である。求人倍率は1996年を底に1997年で一度好転、その後1999年に再度悪化するものの、2000年を境に倍率は継続的に高くなっている。企業の採用意欲の復活により採用選抜の対象となった大学生はより多く、より幅広くなったことが考えられ、サンプルに多少なりとも影響を与えた可能性が考えられる。

3 つめのポイントは研究に使ったデータ期間の長さである。先行研究が数十年に及ぶ長期での傾向変化を確認しているのに対して、本研究では約10年という比較的短い期間での変化を確認している。本当に大学生全般において性格特性に変化が生じているかを確認するためには、さらに長期の観察が必要になってくると思われる。

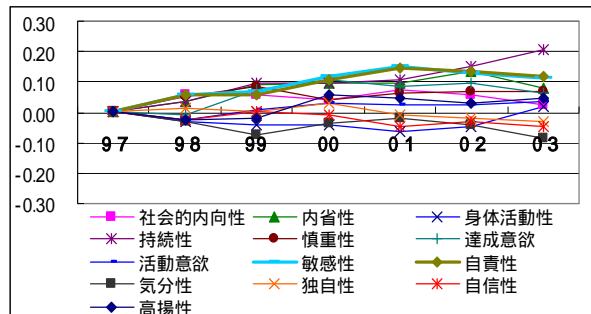
5. 今後の課題

本研究は、1997年から2007年までの大学生の性格変化の確認・考察を行なった。今後の課題としては以下のことが挙げられる。第一に性格変化の明確な結論を得るためにさらに長期での動向の確認が必要である。さらに使用データが採用場面に取得されたものである以上、採用選考という特殊場面がどの程度データに影響を与えるものなのかも確認を行なう必要がある。また、本研究では敏感性・自責性の年代別の傾向の確認を行っているが年代別での他の尺度の傾向について詳細な分析は行っていない。これについては今後確認していく必要があると思われる。

今回確認した傾向の変化は標準得点に換算してみると11年で2~3点程度の変動である。従って実用上は個人差の方が大きいことに留意しなくてはならない。しかし、若手社員の育成が企業にとって重要課題となっているなか若手全体としての傾向の変化について把握していくことは大切であり、今後もデータを蓄積し、大学生の性格変化について引き続き確認を行ないたい。

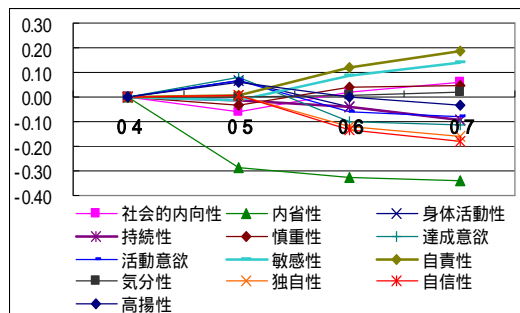
<図1> 1997年～2003年までの変化の推移

尺度	97	98	99	00	01	02	03
社会的内向性	0.00	0.06	0.06	0.04	0.07	0.06	0.02
内省性	0.00	0.03	0.09	0.10	0.10	0.13	0.08
身体活動性	0.00	-0.03	-0.04	-0.04	-0.07	-0.04	0.02
持続性	0.00	0.04	0.09	0.10	0.11	0.15	0.21
慎重性	0.00	0.05	0.09	0.04	0.06	0.07	0.07
達成意欲	0.00	-0.01	0.07	0.11	0.09	0.09	0.06
活動意欲	0.00	-0.03	0.01	0.03	0.02	0.02	0.04
敏感性	0.00	0.06	0.07	0.12	0.15	0.13	0.11
自責性	0.00	0.06	0.06	0.11	0.15	0.13	0.12
気分性	0.00	-0.03	-0.07	-0.03	-0.02	-0.04	-0.09
独自性	0.00	0.02	0.00	0.03	-0.01	-0.02	-0.03
自信性	0.00	-0.02	0.00	-0.01	-0.05	-0.03	-0.05
高揚性	0.00	-0.02	-0.02	0.06	0.04	0.03	0.04



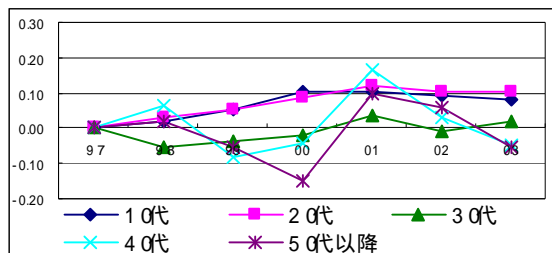
<図2> 2004年～2007年までの変化の推移

尺度	04	05	06	07
社会的内向性	0.00	-0.06	0.02	0.06
内省性	0.00	-0.29	-0.33	-0.34
身体活動性	0.00	0.07	-0.04	-0.09
持続性	0.00	-0.01	-0.04	-0.09
慎重性	0.00	-0.03	0.04	0.05
達成意欲	0.00	0.08	-0.10	-0.11
活動意欲	0.00	0.07	-0.06	-0.08
敏感性	0.00	-0.01	0.09	0.14
自責性	0.00	0.01	0.12	0.19
気分性	0.00	0.00	0.01	0.02
独自性	0.00	0.01	-0.12	-0.16
自信性	0.00	0.01	-0.13	-0.18
高揚性	0.00	0.06	0.00	-0.03



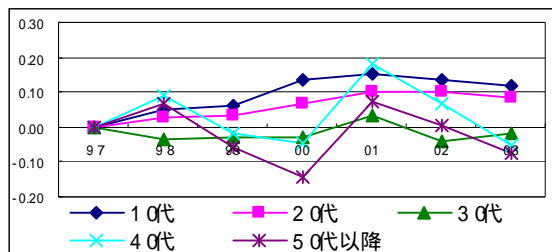
<図3> 1997年～2003年までの年代別変化の推移
敏感性

	10代 17~20	20代 21~29	30代 30~39	40代 40~49	50代以降 50~
97	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
98	0.02	0.03	-0.05	0.06	0.02
99	0.05	0.05	-0.04	-0.08	-0.06
00	0.10	0.09	-0.02	-0.04	-0.15
01	0.10	0.12	0.04	0.16	0.10
02	0.09	0.10	-0.01	0.03	0.06
03	0.08	0.10	0.02	-0.05	-0.05



自責性

	10代 17~20	20代 21~29	30代 30~39	40代 40~49	50代以降 50~
97	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
98	0.05	0.03	-0.03	0.09	0.07
99	0.06	0.04	-0.03	-0.02	-0.06
00	0.13	0.07	-0.03	-0.04	-0.14
01	0.15	0.10	0.03	0.18	0.07
02	0.14	0.10	-0.04	0.07	0.01
03	0.12	0.08	-0.02	-0.05	-0.08



<引用文献>

寺崎正治 1985 パーソナリティ・テストを通してみた大学生の性格特性の逐年変化 人文論及 35(1) 144-164.
 菅原信夫・辻育 1996 京大入学者の性格の35年間の変容()
 - 一般学生(非来談者)の経年変化 - 日本心理学会第60回発表論文集 77
 中村晃 2003 大学生の性格における年代的变化 千葉商大紀要 vol.41 1-19
 瀧上慎一 2001 大学生の自己と生き方 ナカニシヤ出版
 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ 2006 新入社員意識調査
 < http://www.recruit-ms.co.jp/research/monthly/0608_1.html >
 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社 2008 平成20年度新入社員セミナーアンケート結果
 < <http://www.murc.jp/report/press/080602.pdf> >